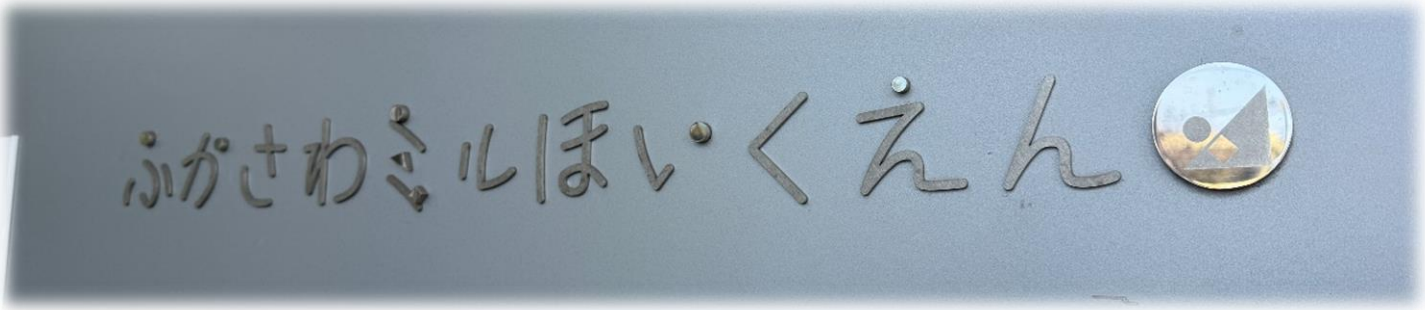
園長コラム～みんなが笑顔になれる保育園への道～　2025 年5月号

園名“ミル”の由来

●毎年 4 月 1 日に行っているウェルカムパーティーでは、新入園児の保護者様に対してふかさわミル保育園の園名の由来について必ずお話しするようにしています。なぜなら保育園にとっての園名はいわば保育園の顔であり、ミッションステートメントに該当する重要なものであるべきと考えているからです。GW 明けに行われる保護者会を目前に控えた今、私たちが「ふかさわミル」の園名に込める意味と、そう考えるに至った背景について改めてお伝えさせていただきます。



●ふかさわミル保育園の「ミル」には、「工場」を意味する英単語の「mill」と、日本語の「見る」の二つの意味が込められています。

●一般的に「工場」と言うと、材料を投入しさえすればベルトコンベアーに乗って同じ製品が正確無比に次々と出来上がっていくようなイメージを持たれる方も多いかもしれませんが、私どもが念頭に置く「工場」はそれとは真逆で、職人が営

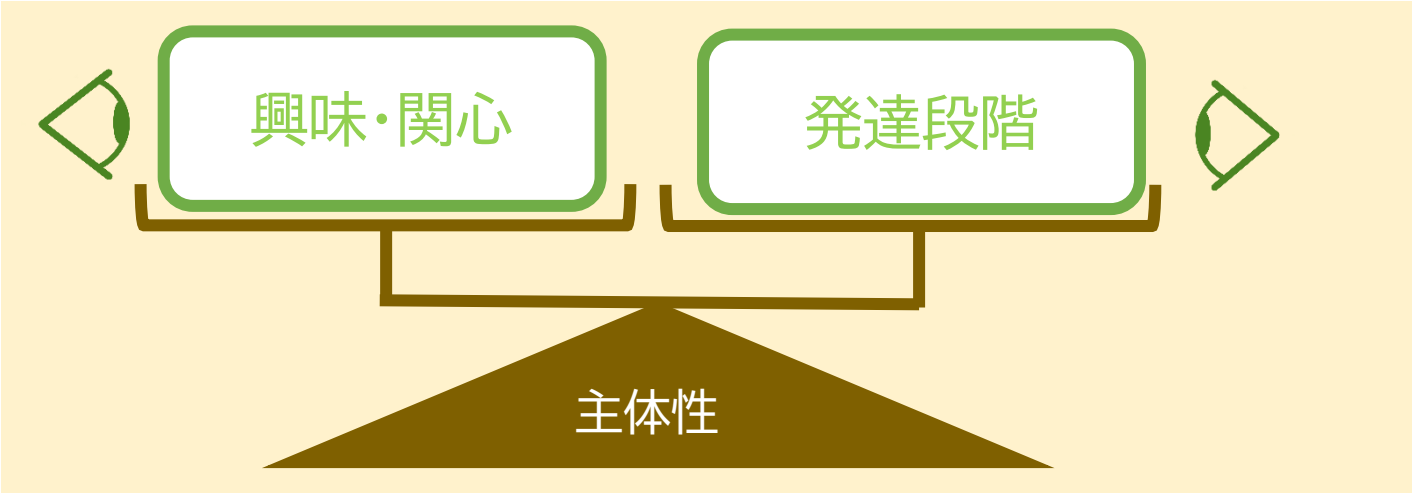
む町の小さな家具工房のようなものをイメージしています。

●熟練した家具職人は、材料となる木の特徴を見極め、その持ち味を上手く生かしながらじっくりと時間をかけ研磨し、組み上げ、格調高い一点ものの家具を世に生み出します。私たちミルの保育者も、子どもの個性を度外視した画一的な決められた型に無理やり押し込もうとするのではなく、子ども一人ひとりの個性を見極め、その子に合った環境を通して丁寧に関わることで、その子の個性を生かした唯一無二の人材を世界に輩出する職人のような存在でありたい。そんな願いが「mill」という名前に込められています。

●そして、子ども一人ひとりに合った環境を準備するために不可欠なのが、子どもの個性をしっかりと「見る」ことです。ここでいう個性とは、単に性格だけでなく、好みや興味関心（マイブーム）、得意なこと、成長発達の過程など多岐に渡ります。

●子どもが主体的に遊びや活動に集中できる環境を考える際、私たちは「その子の興味・関心が何にあるのか」と「その子の成長発達段階が今どこにあるか」の２軸で考えていきます。日々の保育にはその子が興味を持ちやすい題材を用いるとともに、その子の発達段階に合った、あるいは発達を促したり、反対に安心して戻れるような複数の課題を用意しま

す。乳幼児期の子どもの興味・発達は目まぐるしく変化します。必ずしも月齢や発達表だけに捉われない、子ども一人ひとりの「今」をきちんと「見る」ことができる保育者集団であり続けたい、これが「ミル」に込められたもう一つの願いです。



●さて、このように子どもを無垢材に、保育者を家具職人になぞらえる着想を得るきっかけを私に与えてくれたのが、若い頃に父の書棚で見つけ読んだ「木のいのち 木のこころ」（西岡常一・小川三男・塩野米松 著）という１冊の本です。

●**西岡常一氏**（1908-1995）は法隆寺金堂、法輪寺三重塔、薬師寺金堂、同西塔などの復興を果たした“最後の宮大工”と呼ばれた人物です。「木は人間と同じで一本ずつが全部違う。だからそれぞれの木の癖を見抜いてそれに合った使い方をすれば、法隆寺のような 1300 年以上持つ建造物だってできる。」という記述に触れ、大きな衝撃を受け、同時に職人の世界に憧れの念を抱いたのをよく覚えています。



法隆寺五重塔と西岡常一氏

●ところで、私事ですが、私の祖父は奈良県吉野町を中心に林業、主に材木屋を営んでいました。兄・姉とは10歳近く離れて関東で生まれ落ちた私は、吉野の山奥まで里帰りをする機会にはそれほど恵まれませんでしたが、それでも吉野川のそばの貯木場に併設された祖父の家に近づくにつれて匂い立つ檜や杉の良い香り、また薪で沸かしてもらったお風呂の心地良さは、幼心に今もなお鮮明に覚えています。



吉野川(紀ノ川)



山の中の貯木場

●また、私の父は健康上の理由から家業とは別の仕事に就きましたが、生涯を通じての読書家で、学校が休みの日や放課後には、奈良の仏閣を巡り建築物の構造を見て回るのが趣味という個性的な学生時代を送っていたそうです。

●こうして振り返ってみると、このような祖父と父をルーツに持つ私が奈良県出身の宮大工である西岡常一氏に興味を持つに至ったことは、ある種必然だったと思い至ります。

●また、以前のお便りにも書かせていただきましたが、私は保育業界で働く以前は金融分野で 11年間仕事をしていました。菊清会と出会い、最終的に保育の世界に足を踏み入れる端緒となったのが「一人ひとりを大切にする保育」という法人理念でした。日々職員一人ひとりが保育の現実の厳しさに向き合いながらも、理念をお題目で終わらせようとせず、その実現に向けて日々真剣に省察を繰り返しているところに、ある種の感動と宮大工のような職人気質を感じ取ったことが私の転職の決め手だったと今では感じています。

●さて、再び西岡常一氏の言葉に話を戻します。今こうして数十年ぶりに読み返してみると、保育者の心構えとして相通ずることが多いこと、また組織マネジメントにおけるチームビルディングや管理者の心得、教育の在り方について、改めて学ぶことが多々ありました。ご参考までにいくつかその記述

をご紹介して終わりにしたいと思います。ご興味を持たれた方は、是非 GW のお供に、本著をお手に取ってみていただけると嬉しいです。

『木のいのち　木のこころ（天・地・人）　新潮文庫』
天の編　　西岡常一（にしおかつねかず）氏　より引用

【木の癖を見抜く】
●宮大工の口伝に「木は生育の方位のままに使え」というのがあります。山の南側の木は細いが強い、北側の木は太いけれども柔らかい、陰で育った木は弱いというように、生育の場所によっても木にも性質（癖）があるんですな。山で木を見ながら、これはこういう木やからあそこに使おう、これは右に捻じれているから左捻じれのあの木と組み合わせたらいい、ということを見分けるんですな。

【癖は生かし方次第】
●癖というのはなにも悪いもんやない、使い方なんです。癖のあるものを使うのはやっかいなもんですけど、うまく使ったらその方がいいということもありますのや。人間と同じですわ。癖の強いやつほど命も強いという感じですな。癖のない素直な木は弱い。力も弱いし、耐用年数も短いですな。

【物言わぬ木と話し合い、命ある建物に変える】
●木は大自然が生み育てた命ですがな。木は物やありません。生き物です。人間もまた生き物ですな。木も人も自然の分身ですがな。このもの言わぬ木とよう話し合って、命ある建物に変えてやるのが大工の仕事ですわ。木の命と人間の命の合作が本当の建築でっせ。

【木の生きて来た環境、特質を生かす】
●たった 1 本の木でも、それがどんなふうにして種が播かれ、時期が来て仲間と競争して大きくなった、そこはどんな山やったんやろ、風は強かったやろか、お日さんはどっちから当たったんやろ、私ならそんなことを考えますもんな。それで、その木の生きてきた環境、その木の持っている特質を生かしてやらな、たとえ名材といえども無駄になってしまいますわ。

【学校教育と徒弟制度のちがい】

●学校は教えるところやと思っている人が多い。そのために生徒はみんな同じ能力やと考えていますな。本当はみんなそれぞれ違うことを知っているくせに、つごうがいいからみんなと同じと思っています。徒弟制度は初めから教えるんやなくて育てるもんやから、同じやなんて思っていませんな。同じわけがない。違う親、違う環境で育ったものが同じになりますかいな。兄弟だって違うんでっせ。その違いというもんをはじめっから見込んでいますのや。ついてくるのは弟子の方ですさかいに、それに合わせていかなりませんな。一つのことを覚えんと、次には行かれませのや。何でもそうでっしゃろけど、基礎だけはちゃんとせんと前に行かれませんのや。大工の修業の基礎は刃物研ぎですが、刃物研ぎのような基礎はすべてに通じるんですな。ですからここで時間をかけて損にはならん。むしろ納得がいくまでこの段階で苦労したほうがいいんです。近道、早道はないんです。

【生活を共にすることで見つけられ、伸ばすことができる芽】

●私らが「大工にしてくれ」と言われて子どもさんを預かりましたら、一緒に飯を食って生活しますな。寝食を一緒にすることで仕事にも大工の生活にもなじんでくるんです。大工というのは現場に出ているときだけやないんです。生活も大工なんです。学校と違って生活の仕方から全部教えるんです。そうした中でその子のよさ、芽を見つけるんですな。そして大工にふさわしい芽を伸ばしてやりますのや。（中略）育てるということは型に押し込むのやなく、個性を伸ばしてやることでしょう。それには急いだらあきませんな。

【有効な無駄もある】

●今の教育はみんな平等やといいまずが、人は一人ひとり違いまっせ。それを一緒くたにして最短距離を走らせようと思っても、そうはいきませんわ。一人ずつ性格も才能も違いますのや。その不揃いなものを上手く使い、それぞれの異なった性格を見出すのは、そう簡単に無駄なしにはいきませんで。無駄と思うて捨てたり、見過ごしてきたことに、ずいぶん大事なものが含まれているんと違いますかな。

園長　橋本　英明